

19	安城	安城西中学校	アマノ リサ
			天野 里咲

分科会番号	20	分科会名	総合学習
-------	----	------	------

研究題目 「自分の思いを伝え、主体的・協働的に課題解決に取り組む生徒の育成」
 ～中学2年 総合的な学習の時間「西中地域応援課が地域に贈るGIFT」の実践を通して～

1 主題設定の理由

本学年の生徒は、決められたことに対し真面目に取り組む生徒が多い。一方で、目の前にある課題を自分事と捉え、主体的に考え行動する生徒は少ない。例えば、各学級のリーダーが集まる会で、教師からの提案をした際には、個々には実行したいという思いがうかがえたが、生徒同士で意見の交換や話し合いを進めることができず、実行には至らなかった。また、毎週末に行う伝えタイムでは、学級全体で活発に話し合う練習をすることを目的としているのに反し、一部の生徒の意見のみで話し合いが進んでしまう様子も見られた。このような状況は、個々の思いはあっても、互いの意見を聞き、そこから解決策を導き出し、共同で解決していこうとする経験が少ないことが原因の一つにあるのではないかと考える。

このような実態から、協働で物事を成し遂げる成功体験をつむことで、自信をもち、自ら考え進んで行動できるのではないかと考えた。そこで、本研究では、「西中地域応援課が地域に贈るGIFT」と題し、地域応援を共通の課題として、生徒の思いを大切にし、生徒たち自ら課題を解決できるよう、互いの意見を聞き合う活動を行う。活動を通して自分の思いを伝え、互いの意見を尊重する中で協調性を高め、主体的に行動できるようになってほしいと考え、本主題を設定した。

2 目指す生徒の姿

主題を受けて本研究で目指す生徒の姿を次のようにした。

- 課題を自分事として考え、課題解決のために主体的に行動を起こすことができる生徒。
- 話し合いを通して自分の思いを伝え、協働的に活動に取り組もうとする生徒。

なお、目指す生徒の姿にある「協働的に活動に取り組もうとする姿」を、「同じ目的のために、互いの意見を出し合ったり協力して活動し合ったりする姿」とした。

3 研究の構想

(1) 研究の仮説

【仮説1】

生徒の思いを中心に据え、生徒の思考の流れに沿って課題設定を行い、小さな成功体験を味わえる場を設定すれば、生徒は課題を自分事として捉え、自ら主体的に考え行動する意欲が高まるだろう。

【仮説2】

生徒主体を大切に、協働して課題解決を行う単元を構想すれば、必然的に話し合い、かかわりあう場が生まれ、自分なりの考えや思いを他者に伝えようとするだろう。

(2) 研究の手立て

仮説にせまるために、次のような手立てを講じることにした。

- <仮説1にせまるための手立て>
- ① 1年次の総合的な学習の時間の学習内容を取り上げ、生徒の思いから課題設定ができるように、導入を工夫する。
 - ② 問題解決を自分たち自身の力で行ったという実感を味わうことができるように、取材見学、制作、交渉など生徒主体の活動の場を多く設定する。
 - ③ 振り返りの時間を設定し、生徒の思考に沿って単元を進められるようにする。
- <仮説2にせまるための手立て>
- ①協働することの価値を感じることができるよう、一人では実現できない活動として、地域応援を目標としたマルシェを開催することを課題とし、マルシェ開催に向けて話し合い、協力する場を設定する。
 - ②自分たちの課題を可視化し、見通しをもって課題解決に挑めるように、販売活動までのロードマップを作成する。

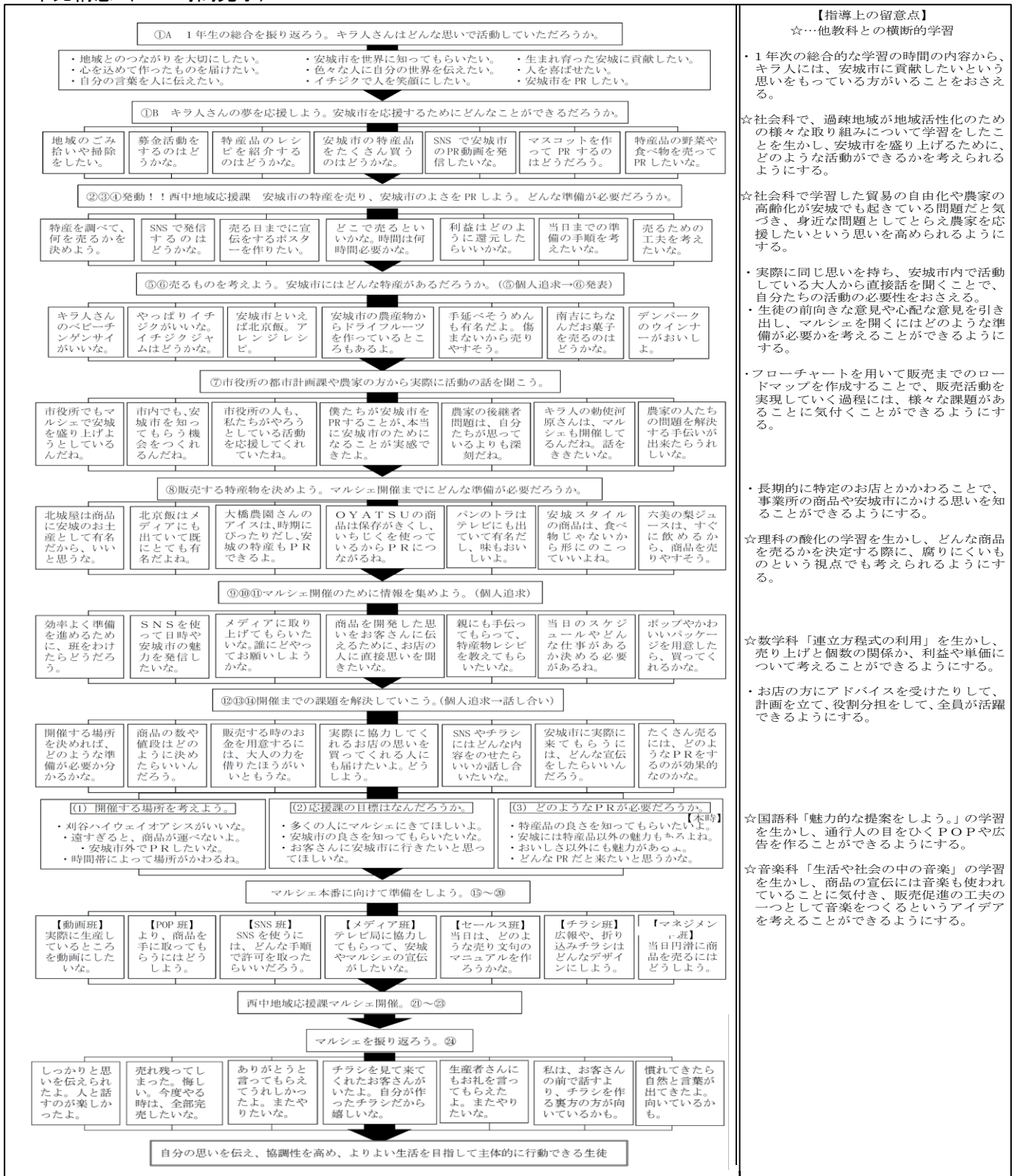
(3) 仮説の検証方法

本研究では、研究後の意識調査や抽出生徒A（以下Aと記述）の変容を追うことで、仮説の妥当性の検証を行う。抽出生徒の実態と願う姿を以下のように捉え、その変容を追う。

Aは、物事に対して意見をもつことができる。しかし、一人で考えて解決できないことに対して「自分にはできないこと」と線引きをして始める前から結論を出し、問題解決に取り組むことを苦手としている。総合や学活などの学級内で書くワークシートや振り返りでも、「無駄だと思う」消極的な意見や否定的な意見が多くみられる。

Aには、本研究を通して、困難に感じる問題にも勇気をもって取り組み、主体的に解決案を模索してほしい。また、実際に主体的に行動したり、仲間と協同的に活動したりすることで得られる成功を体験し、困難な問題であっても、解決方法を模索し行動することの大切さに気付いてほしい。

4 単元構想（24時間完了）



5 研究の実践

(1) 生徒が課題を自分事として捉え、自ら主体的に考え行動する意欲を高めるために

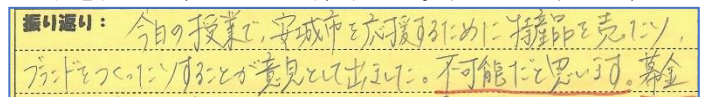
ア 1年時の活動を振り返り生徒の思いから課題設定ができるよう導入を工夫する（手立て①③）

第1時では、生徒が1年時に行った総合的な学習の時間の内容を振り返った。1年時では、安城市で活動しているキラキラした大人（キラ人）について、取材活動やまとめ【資料1】の活動を行っている。生徒は活動の中で、安城市には、安城市に貢献したいという思いや、人に喜んでもらいたい、人の力になりたいという思いをもっている人がいるということを知った。生徒の思考が、キラ人が困っていることや安城市のために活動していることに向くように、自分たちで制作した「キラ人新聞」を読み直し、安城市のために働いている人を話の中心に据えて授業を展開した。そこで、キラ人が困っていることや安城市に対して抱いている思いを挙げ、生徒にも安城市のために行動を起こしたいという思いをもつことができるように、「キラ人とかかわりの中で、多くのGIFTをもらったので、今度はキラ人さんの安城市を盛り上げたいという夢を応援する形でGIFTを贈り返そう。どんな応援ができるだろうか」と投げかけた。生徒は、今までの経験や知識をもとにポスターや新聞で活動を紹介する、地産地消を宣伝し、地元の野菜を買ってもらう、ごみ拾いを手伝う、販売を手伝う、テーマパークを建設する、駅を増やす、など様々な意見を発表した。話し合いの途中で生徒に「実現可能な活動かどうか」「いままでにやったことのない活動かどうか」という視点を提示した。その結果、SNSで特産品のPRをする、「安城市の企業と協力したい、という意見に生徒の思いが集中した。学級の大半の生徒が「特産品を販売する。」という活動に対して興味をもち、意欲を示していた。一方で、生徒Aのように、自分たちには不可能であるとする生徒もいた【資料2】。



【資料1 キラ人新聞（一部）】

は不可能であるとする生徒もいた【資料2】。



【資料2 生徒Aの振り返り1】

イ 問題解決を自分たちで行った実感を味わうことができる活動の場を設定する（手立て②③）

本単元では、取材見学、制作、交渉など生徒主体の活動を生徒の思いに沿って三つの活動を行った。最初の取材については、安城市役所都市計画課の方や農家の方をお招きした講演会である。安城市について一人調べを行う中で生徒は、実際に安城市や農家の方が、どのような思いをもって広報を行っているのか聞きたいという意見が生まれたためである。二つ目の活動では、自分たちが担当する事業所（1グループ18人程度で1つの事業所を担当し、担当事業所と連携を取りながら販売活動を行っている。）が決定した後に、生徒から事業所の人から実際に話を聞きたいという意見が出たタイミングで、事業所への見学などを行った。また、事業所での見学では、ただ見て終わりになってしまうように、事前に質問事項を用意した。質問事項を考える際には、自分たちが実際に販売するとき、必要な情報を集めようと投げかけると、当日の見学では、店員に対し、セット売りするとき値引き可能か、商品はいくらか卸してもらえるか、販売するときの価格は自分たちで決めてもよいか、などを積極的に質問する生徒の姿があった。三つ目の活動は、資源回収である。生徒たちは、この活動を行うにあたって、計画を立てていくうちに、資金をどのように用意するかという問題に直面した。生徒から資源回収を行いたいという意見が出た。生徒は校長へ自分たちで活動の説明を行い活動の許可をもらった。資源回収の宣伝や当日の回収も自分たちで行った。

ウ 振り返りの時間を設定し、生徒の思考に沿って単元を進められるようにする（手立て③）

本単元では、毎時間の最後に振り返りの時間を設定した。上記した、活動のタイミングや、販売場所、生徒が興味を持っている特産品を一人調べの振り返りからあらかじめ把握することで、実際の生徒の話し合いより早く事業所にアポイントメントをとることができたため、生徒の思考の流れを妨げることなく地域の方や事業所と関わる機会をもつことができた。

(2) 自分なりの考えや思いを他者に伝えようとするために

ア マルシェ開催に向けて話し合い、協力する場を設定する（手立て④）

本単元では、協働することの価値を感じることができるよう、一人では実現できない活動として、地域応援を目標としたマルシェを開催することを課題とした。生徒の中には、マルシェに興味を見せる反面、始まったばかりで見通しの立たない活動に対して不安を感じる姿も見られた。そのため、学級全体で、マルシェ開催のためにやることを話し合った。生徒が個々でもっていた不安を共有し解決策を全体で考えることができたため、見通しが立った様子であった。しかし、中には、生徒Aのように大人に頼らないとできないことが多い【資料3】と考えている生徒もおり、より細かい見通しをたて、自分たちでやるにはどうしたらよいかを考える時間を設けることが必要だと感じた。

振り廻り：今日は具体的に流れを考えた。私たちがやることは、大い親ババとデパートの方から、大町にきてお話しは、1人1人の準備と協力が必要だから改めて話し合おう。特に、7月20日までに、と身振的に行動をしようというのを決めた。

【資料3 生徒Aの振り返り2】

また、単元全体を通して、不安なこと、学級全体で決定しなければならないことは、積極的に話し合いの場を設けた。特に大きな項目は、協力する事業所、販売場所、PRの方法の3点である。また、PR方法を考えるにあたり、応援課の目標を再確認する話し合いも行われた。本単元の核である、PRについての話し合いでは、QRコードを使用して情報を広めようという意見が出たため、QRコードに注目して話し合いを進めた。話し合いでは、お互いの意見に対して、賛成、反対の視点で議論をするのではなく、よりよい使い方を学級全体で模索する様子が見られた【資料4】。最初は活動に消極的だった生徒Aも、活発に意見を出していた。また、振り返りでも、実際に使いたい意見もたくさんありました、と記述しており【資料5】、活動を自分事として考えている様子や話し合いのなかで、自分では思いつかなかった新しい視点を見つけていることがうかがえる。

- C1: チラシとかにQRコードを載せる。
- C2: チラシに載せるだけだと捨てられるかもしれないよ。商品と一緒にQRコードを手渡ししたらいいんじゃない？
- CA: 一か所じゃなくて様々な場所にQRコードを貼ったらいいんじゃない？
- T: 読み取ったQRコードにはどんな情報が入っているの？
- C3: 安城市のいいところを入れたいな。安城やお店のクイズ。
- C4: その二つを詳しく書いたほうがいいんじゃない？
- C5: 最終目標は安城市を知ってきってもらうことだから、2つとも載せたほうがいいね。
- C2: クイズは解くのに時間がかかるからやめたほうがいいよ。
- C4: クイズより割引券のほうがいいんじゃない？
- C6: クイズは楽しみながら安城やお店を知ってもらえるからあったほうがいいと思う。クイズに正解してキーワードを伝えたら割引されるとかはどうかな。
- C7: それはいい案だね、お店に割引をしてもいいか聞いてみたいな。

【資料4 授業録】

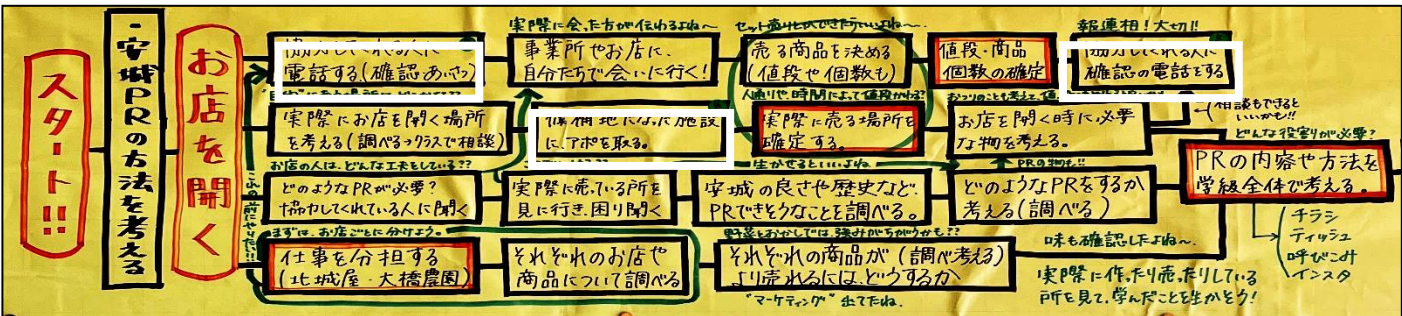
イ 販売活動当日までのロードマップを作成する（手立て⑤）

振り廻り：今日の授業では、PRの方法について考えた。その中で安城の町、前回のやりかたを自分たちの経験からPRの方法を出して、実際に使いたい意見に決められた。

【資料5 生徒Aの振り返り3】

手立て④でも触れたように、活動に対して、大人に手伝わってもらわないとできないことが多いと考えている生徒は多い。そこで、自分たちの課題を可視化し、見通しをもって課題解決に挑めるようにロードマップを制作した。生徒には一人三色の付箋を配付した。色によって意味が異なり、赤色は大人にやってもらうこと、黄色は自分でやること、青色は考えるうちに出てきた新しい項目となっている。生徒は自分が思いつくマルシェ当日までの準備内容を付箋に色を振り分けながら書き出した。各々が書いた付箋を持ち寄り4人グループで一つのロードマップを制作した。その際に、付箋が赤色のものについては、作業を細分化することで自分たちにできるところもあるのではないかと話し合い、黄色の付箋に変更しながら制作を行った。その後、同じように学級で一つのロードマップを制作した【資料6】。

学級での話し合いが終わった後、生徒が大人にやってもらうことに分類したのは資料7の白い枠内にある3つだけである。付箋に自分で項目を書いている際には、ほぼ赤色だった生徒も、話し合いの中で、自分たちでやるにはどうした



【資料6 学級全体で制作したロードマップ】

らよいかを考えることができた。

(3) マルシェ本番に向けて準備をしよう。

最初に、話し合いやロードマップをもとに作業の分担を行いたいという声が多数上がったため、班の分担を行った。序盤の話し合いの段階では、先生にやってもらおうという意見が出ていたが、話し合いを重ね生徒が自ら様々なことを決定し、アイデアを出す中で、ロードマップを作る段階では先生に任せようとしていたことを、自分たちでできないか考え始めた。そして、1時間に1つの議題に対して話し合っていると時間が足りなくなってしまうという課題とONENOTEというアプリを使用することで、学級全員にデータで情報が渡せるという解決方法を教師に対して提案する生徒の姿も見られた【資料7】。はその生徒が自主的に制作したデータである。教師は生徒の作ったまとめを発表する場を設けると、ONENOTEを使用したいという意見が多数上がったため、学級内で使用することができるよう整備した。Aは特にお店のレイアウトを考えていた。レイアウトを考える中で、机にかける布が必要なことに気づき、生徒同士でどのように入手するか相談していたため、教師が「布を無料で提供してくれる企業があるよ。」と声をかけると、「電話したいです。」と自ら台本を制作し、電話をかけた【資料8】。また、商品の数に対してスペースが大きく、そのスペースを埋めるため木箱を班の仲間と一緒に自主的に制作した。ほかにも、話し合いの段階に案として出していた、ラジオで宣伝する、試食の動画を作る、自分たちでホームページを作るなどを実現するために生徒が積極的に働きかけを行い、準備を進めた。

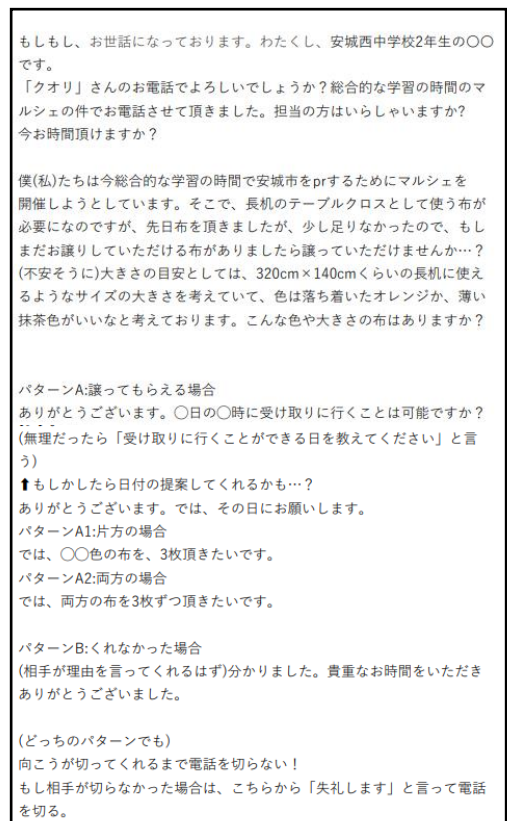
5 研究の結果と成果

(1) 仮説1の検証

本単元は、生徒が話し合いの中で決めたことを行うという程で全体を進行したことにより、生徒が主体的に計画を立て行動を起こす姿が見られた。また、事後アンケートでは、自分たちの活動について約80%の生徒が不十分な点があったと回答している【資料9】。一方で、もう一度販売活動を行いたいという質問に対しても、90%以上の生徒が意欲を示している【資料10】。なお、「今回と違う形」というのは、場所や商品、役割を変えて行いたいという意思をさしている。また、不十分であったと答えた生徒へ改善したい点を自由記述で質問したアンケートでは、「もっと人が集まるとこで商品の数を増やし屋台っぽい感じにしたい。」「恥ずかしがらず、積極的に宣伝をできるようにしたい。」「お客さんに質問されて答えられなかったのでどんな質問を聞かれても大丈夫なようにもっと準備しておきたいです。」など、今回のマルシェでの経験からよりよい活動にするためにはどうしたらよいかを考えている姿が見て取れた。また、見学や交渉を行い、それぞれの体験を乗り越えたことにより、マルシェの準備や必要物品の制作では、積極的に事業所や協力企業への連絡を行ったり、会計のマニュアルを制作するなどの、事業所見学で学んだことを自分たちの活動に活かそうとしたりしてい



【資料7 生徒が制作したまとめ】



【資料8 Aが制作した電話の台本】

